

碩心

社団法人 日本詩吟学院 岳風会 認可
神奈川 碩心 会 発行

11年 8月現在 逗子地区 葉山地区 大船地区 (合計)	会員数 129名 184名 31名 344名	11年 8月 (325号) 発行者 千 葉 岳 関 編集者 白 井 岳 麗
--	------------------------------------	---

行事予定

- 碩心会秋季審査会
日時・9月12日(日) 受付9時より
場所・逗子図書館ホール3階
受審料・千円
- 神奈川県本部事業予定
総伝会親睦吟詠大会
日時・10月24日(日) 午前9時より
場所・横須賀商工労働会館
- 神奈川県本部創立45周年記念吟道大会
日時・11月21日(日)
場所・横須賀芸術劇場大ホール
- ◎合吟に参加される方に吟題のお知らせ
男性全員 四 時 陶 潜 二巻87
女性煙軒 蛭を観る 大槻磐溪 四巻15
女性葉山 自 詠 菅原道真 三巻23
- 総本部より教本の作者名変更のお知らせ
皆伝の審査課題「秋日偶成」三巻86頁の作者名を程願より程明道に変更いたします。
- 第110回全国大会(名古屋)吟行会行程
10月16日(土) 久能山東照宮―長島温泉(泊)
10月17日(日) 全国大会 名古屋公会堂
10月18日(月) 熱田神宮 全行程バス利用

《会員の動き》

10月17日第110回全国大会(名古屋市公会堂)に総本部参事(碩心会会員)の立澤御岳さんが大会実行委員として参加します。

堀内E班根岸啓岳さんが11月14日(日)財団吟剣詩舞道大会(武道館)に女性30名の合吟に出吟します。

平成十一年七月二十五日

受講第45回夏季吟道講座偶感

宇都宮 徳 岳

●●●●●●●●
講座開催九段森 講座開催九段の森に
●●●●●●●● 会員多数偕びて来臨す

○師資一體磨吟詠 師資一休吟詠を磨く
○流統如斯傳古今 流統斯くの如くして古今に伝う

(語釈) ○下平声十二侵韻仄起格七言絶句
○来臨はその場に出席すること
○師資は師匠と弟子

○流統は流儀の伝統
ここでは岳風会の流統を云う

(韻字) 森 臨 今

清音朗々たり

指導者吟道講座開かれる

佐久間 爽 岳

炎暑のつづく8月1日(日)に、県本部主催の「指導者吟道講座」が川崎・エポックなかはらに於て開催された。県内各地から準師範以上の方が集まり会場は満員だった。

第一講 総本部理事長 長谷川岳聖先生

「指導者としての心構え」

私は詩吟を始めて65年経ったが上手になれない。しかし立派な吟道家になりたいと思う。県本部創立45周年となるが、和をもって新世紀を迎えたい。

指導者としては、質も吟技も、指導する数の上においてもバランスのとれた人間であることが大切である。

第二講 講師 森脇 恵岳先生

「子等を思ふ歌一首」 山上 憶良

吟は相手の心に触れあえるものを目指している。声の質は変えられないが「ひびき」のある声になるよう磨きをかけよう。

発声練習は「アエイウエオアオ」の方法で基本の音階から一段づつ上げ、高音に至るま

で5段階ほど上げて行く。下音はその反対にどこまで下音として声が出せるか？。

アーと主音を前へ出すよう、発声練習をやることにより、出ない声も出るようになる。

第三講 講師 鈴木 岳順先生

「千曲川旅情の歌」 島崎 藤村

第四講 講師 河野 岳景先生

「湘夫人の詠」 元 好 問

第五講 講師 立平 岳昇先生

「俳句 鷹のつら」 村上 鬼城

「俳句 漱石に別る」 正岡 子規

俳句は主音で上げること。言葉の意味に従って発音することが大切である。

吟は心の響きであり、魂の叫びである。指導者として心掛けたいことは「人は吟につきず、人に蹴く」ということである。

一吟について³⁰⁰回の稽古をすれば、人前で吟じられる吟になると立平先生のお話でした。

第六講 講師 橋川 岳先生

「磯浜望洋樓に登る」 三島 中洲

「客舎の壁に題す」 雲井 龍雄

朝9時半の受付から16時35分までの長い時間であったが、平常聞くことのできぬ吟法や講義を受け、貴重で充実した一日であった。

総本部主催夏季吟道講座

基礎講座 初挑戦記

堀内B 角 田 一 男

梅雨小僧の最後の足掻きとも思われる、各地に大きな被害をもたらした集中豪雨も通り過ぎ、夏本番を迎えた7月24、25の両日、九段会館にて総本部主催の夏季吟道講座が実施されました。

入会后、一年にも満たない私にとって時期尚早の感がありましたが、意を決して基礎講座に参加させていただきました。

会場は2、3階席に若干の空席があつたものの全館はほぼ満席。全国から参加された熱心な会員は一千名弱で、活気に満ち溢れておりました。休憩時間における周りの皆様の話題は教場のこと、お弟子さんのこと等で、そうそうたる方の集まりであることを改めて認識し、場違いな所にいる自分を感じ、プレッシャーに押し潰されそうになりました。しかし徐々に開き直り、ついにはずうずうしく声を出すことが出来ました。ただ二本が精一杯の私にとって、それ以上の高音では付いて行けない所も随所にありました。

講師は2日間で8名の全国から選ばれた先生方で、私たちの加藤岳洵先生は初日の第一講座を担当され、課題は「偶吟」新島譲および「無題」夏目漱石の漢詩二題でした。

偶吟は国のリーダーが私利私欲を追いかけ国策をおろそかにしている様を嘆いているもので、現在の世情と通じるものがあり、感ずるところがありました。

九段会館のような大会場の舞台で、講義されている先生のお姿を拝見して感動し、周りの諸先生方に「私の教場の先生です」と自慢してしまいました。

講師の先生方はユーモアあり、厳しさあり、時に涙ありの熱の入ったご講義を受け、充実した二日間を過ごさせていただきました。



大正元年九月十三日

明治天皇御大葬の日

乃木夫妻殉死

中村 岳 愛

乃木希典は嘉永二年（一八四九）に生まれ、大正元年（一九一二）64才没。明治の軍人、陸軍大将、伯爵、長州毛利侯の家臣、乃木十郎希次の三男。江戸で生まれたが、10才の時に父母と長州に帰り、伯父の玉木文之進のもとに寄寓、その薫陶を受け、18才の時、藩校明倫館に入った。山口県人。

慶応三年（一八六七）高杉普作ひきいる奇兵隊報国隊に加わり幕軍と戦う。のち戊辰の役、西南の役等で戦ったが、西南の役の植木の戦いで軍旗を奪われたため、引責自刃しようとしたが、部下に諫められ止まった。しかしこの事は後年死ぬまで彼の心を苦しめた。その後乃木聯隊の勇猛は天下に知れわたり、日清、日露の戦争に加わり、日露戦争の時は旅順攻撃がはじまり、苦戦五ヵ月、屍は山をなし、長男勝典と次男保典は戦死、その後奉天での戦を経て帰国したが、幾多の士卒を失なつたので、明治天皇に復命した時、割腹

して罪を謝したいと願つたという。

明治40年学習院長に任ぜられたが、45年7月30日明治天皇崩御。そして9月13日御大葬の日、午後8時靈柩車出発の号砲を合図に、静子夫人と共に殉死したのであった。古武士の風格をもつた清冽な将軍乃木希典殉死の報は、内外に異常な反響を呼び、心に深く残るのであった。

辞 世 乃 木 希 典

うつし世を神さりましたし大君の

みあと慕ひて我はゆくなり

神あがりあかりましぬる大君の

みあととはるかにおろがみまつる

乃 木 静 子

出でまして還ります日になしと聞く

今日の御幸みゆきに遇ふぞ哀しき

故郷の岸を離れて

堀内B 西岡清岳

民族学者柳田国男が学生時代の明治30年、愛知県渥美半島で一夏を過ごしていた。

伊良湖岬の散歩で、ココヤシの実を三度まで見た。一つは割れて真っ白な果肉があらわれ、他の二つは皮に包まれていた。「はるか波路を越えて、まだ新しい姿でこんな浜辺まで」と、その新鮮な驚きを友人の島崎藤村に伝えた。

ともに南の島に思いをはせて、島崎藤村は「海上の道」を構想し「流離の憂」をうたった。「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ」の詩はこうして生まれた。

その感動をもう一度と今年も沖繩の石垣島の黒潮に椰子の実104個が流されましたが、石垣島から伊良湖岬まで波路は約千六百kmの長い旅路を漂い、その内56個が鹿児島島へ着き高知や遠くは福島にも漂着した。また日本海側でも山形の浜辺で見つかっているが伊良湖岬に流れ着いたものは一つもない。

殆どの椰子の実は黒潮に乗っていつまでも洋上を漂い続けるのであろうか。

実を取りて胸にあつれば

あらたなり流離の憂ひ

海の日沈むを見れば

激り落つ異郷の涙

この詩が出来てから100年以上も経った。

つい最近のこと、小学一年生だった少年が、種子島より「ピン」の中に手紙を入れて流した。その手紙が10年後に遠くマレーシアの海岸に流れ着いた。

内容には「この手紙を拾った人とは是非お友達になりたい」と、その少年の夢がかない拾い主が勤める石油会社の招きで現地に渡る。故郷の岸を離れて、汝はそも波に幾月

(読売新聞社 編集手帳より)

俳句

佐久間 爽岳

帆の彩の思ひおもひに夏が去る

水神の幣をかけ替ふ秋の風

寺脇 宇岳

凌雲花空に向つて乱れ咲き

松籟の奥に秋立つ気配かな

後藤 道岳

流燈や追慕の情のひたすらに

法師蟬日照雨の中を鳴きしきる

住所変更

22 佐藤岳初 葉山町堀内一四五二 向葉荘 10j

☎〇四六八―七六一〇二二四

訂正

7月号4頁 堀内B 一之瀬汀岳を堀内Dに

退会

97 隈園晴岳(吟甫) 158 加藤雪岳(吟甫)

187 山下恵岳(若葉) 231 大塚寛風(松和)

252 芹田春風(一色) 309 永山悦風(若葉)

311 藤原光風(栄) 312 今井草風(吟秀)

313 今井恵風(吟秀) 330 市川静風(吟秀)

436 大沼紫岳(吟秀) 476 地現星泉(吟甫)

追贈

加藤雪男(雪岳)

去る7月5日病氣にて死去

総本部より九段位を追贈されました。

編集後記

毎日うだるような暑さが続くと思えば、滝のような土砂ぶり。

会員の皆さん夏休みを如何お過ごしでしょうか。11年も2/3が終り、9月に入れば早速秋季審査会から、45周年県大会と盛り沢山の行事をひかえています。夜空の星が輝きを増してきました。元気で頑張りましょう。